照明探偵団通信

照明探偵団機関誌　第01号　1997年9月
発行日＝平成9年9月01日　発行人＝面出薫　編集＝木下史青　田中裕美子
照明探偵団・事務局　〒150　東京都渋谷区神宮前 5-28-10
ライティング プランナーズ アソシエーツ内（葛西玲子・木下史青）
TEL：03-5469-1022　FAX：03-5469-1023
e-mail=lpa@lighting.co.jp　http：//www.lighting.co.jp/tanteidan/jtanteiframe.html

目次

巻頭言・東京湾からエーゲ海へ　面出　薫　・・・1
特集／ヨコハマ照明探偵団
　立体企画第14回連続実践講座＋夜景ウォッチングツアー　渡辺　明日香　・・・2
　ヨコハマの夜景演出　足立原　淳　・・・3
恋愛夜景ロン　東海林　弘靖　・・・4
船乗りのミナト・ヨコハマ　吉沢　望　・・・4
スタイルのない光　長坂　房子　・・・5
「新潟にこいてば、待ってるすけね」　小林　勉　・・・5
"ねぶた"のあかり　田沼　彩子　・・・6
ミュンスター野外彫刻展ーカッセル・ドクメンタX報告　木下　史青　・・・6
照明探偵団実践ミニ講座　ポール灯をスケッチしてみよう　坂本　陽一　・・・7
照明探偵団イベントカレンダー　・・・8
暗い国での照明探偵　葛西　玲子　・・・10
照明探偵団日記　窪田　麻里　・・・10

巻頭言・東京湾からエーゲ海へ

8月23日、土曜日、何かに追われるようにして飛行機に飛び乗った。昨夜までの時計の早さを忘れて、全てのしがらみを東京に置き忘れた振りをして、狭い機内のシートに着く。今から12時間ほどでパリに着き、乗り継いでアテネに向かう。エーゲ海の海と空の色を見に1週間ほどの休暇を取ったのだ。「探偵団通信の巻頭言を2〜3日中に書いてファックスしてください」と言う探偵団事務局の木下さんの言葉だけが気に障って、小さなメモ帳を取り出した。

空の上だけが無国籍な状態になれる。大地との接触を断つことによって初めて、身体ともに無重力感を覚えニュートラルな感覚に漂える癖が私にはある。飛行機の中では神と人間の中間的思考が許される。この狭い空間では生命の心配は全く必要ない。自分の命を完璧なまでに他人に預けてあるので、もはや命に関する何の心配も許されない状態なのだ。だから、飛行機の中ではできるだけ眠らずに、多くの大切なことをずーっと考えていることにしている。

照明探偵団は生涯学習のようなものだ。ライフワーク的に楽しんで行くことが肝要で、絶対に眉間にしわを寄せながらやってはいけないと思う。焦らずゆっくり時間をかけて取り組むべきだ。ジントニックを飲みながら、今までの忙しない自分の毎日を少し反省した。

それから2日後、8月25日、ロードス島の限りなく青く透明な海と空を眺めている。水平線はちっとも水平ではなく、大きな弓なりの円弧を描いている。空の色と海の色が、遠くに見える地球の円弧を境に共鳴しあっている。どうして海の色がこんなにまで深く楽天的な水色をしているのかは、誰も答えてくれない。「エーゲ海の海水には石灰質が多く含まれていて・・・」などと言う説明は嘘だ。神が選んだ海だからこそこんなにまで美しい色を見せるのに違いない。何とも青の色の奥深いことだ。

エーゲ海を見渡す丘の上に立ちながら、ふと東京を発つ寸前の光景を思い出した。8月22日、金曜日、私は東京臨海副都心部のお台場に集合する、狂乱の屋形船を探偵していた。たくさんの提灯を点した船は50艘も群れていただろうか。重なり合うような船からは、カラオケの増量された拡声音が響きわたる。人工的に作ってはいるが、これも浜辺だ。江戸の情緒の消え失せた屋形船遊びに大きく落胆していた。どうしてここまで東京の生活は水に対して、遊びに対して孤独を強いられるのだろうか。

そのギャップの深さは目眩を感じるほどである。同じ塩気を含んだ海水でありながら、この不平等な光景は何なのだろう。いや世界中の海や川、水辺に関する景色と生活の文化は、何と多くの不平等な現実を呈していることか。

照明探偵の学習態度として大切なことは、先ず多くの特殊解に触れることだ。そしてその差違に悩むことである。多くの光や照明文化の差異がどんな質のものなのか、何によって起こったのかを探求することだ。

いやいや、またいつもの癖、照明探偵団の頭が固くなってきた。もう少し楽に、楽しみながら探偵しようと言ったばかりなのに。エーゲ海をもう少しのんびりと時間をかけて眺めていよう。理屈を言わずに海を見ていると、いつしか太陽の色も赤くなり水平線に接近してきた。この島では雨も曇りも許されないらしい。毎日、雲一つない青い空だけが約束されている。

（面出 薫・L.P.A.）

特集

ヨコハマ照明探偵団

'97.7.26 (SAT)

立体企画
第14回連続実践講座十夜景ウォッチングツアー

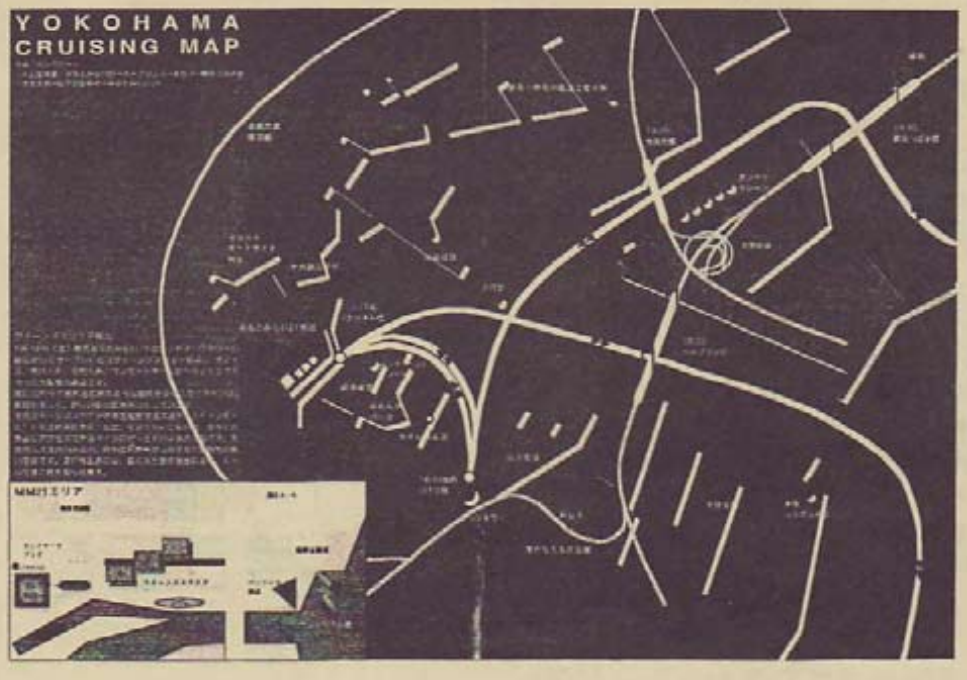
●「ミナト・ヨコハマを探偵せよ！」

去る7月26日、連続実践講座のシリーズ第14回として、今回は約120名の探偵団員が横浜に結集した。

台風による暴風雨に見舞われ、あいにくの悪天候ではあったが、講座とウォッチングツアーの二本立ての企画ということもあり、団員はみな意気揚々の様子。

まず、大さん橋国際客船ターミナル内のホールにて作戦会議ならぬ、パネルディスカッションが行われた。パネラーには、団長の面出氏をはじめ、ゲストに横浜市都市デザイン室主任調査員でアーバンデザイナーの国吉直行氏と、夜景評論家の丸々もとお氏を迎え、横浜の都市景観についての鼎談となった。

なかでも、キング・クイーン・ジャックという愛称を持つ県庁本庁舎、税関、開港記念館などの歴史的建造物のそびえるレトロ夜景地区と、横浜美術館、パシフィコ横浜といったみなとみらい21地区のネオ夜景とを比較する、時系列的視座でみた場合の説明からは、横浜の歴史的変遷をたどることができた。



●作り手の大御所 vs 受け手の大御所

国吉氏は、魅力ある横浜の都市空間づくりに25年間も携わってこられただけあって、これまでの取り組みや計画等の報告はいずれも詳細であり、その解説からは、横浜をこよなく愛し、自らの手で現在の横浜を導いてきたという凛々しい姿勢が感じられ、作り手の大御所といった印象を感じた。

また、丸々氏からは、おすすめの夜景スポットのリアリティーあふれる紹介がなされた。詳細なデータが次から次へと披露されるたび、メモをとるのに忙しい団員の姿が見られた。実体験に基づく丸々氏の解説からは、横浜広しと言えども、これほどまで熟知している者はない、受け手の大御所と呼ぶにふさわしい印象を受けた。（氏のフィールドワークの結晶とも言える著書『東京夜景』（シリーズ3作）七賢出版を御参照のこと）いわゆるトレンディースポットと呼ばれるホテルのラウンジやバー、飲食店の照明環境や、そこから眺める夜景は、雑誌等のマスコミ媒体で採りあげられることは多いものの、イメージ先行になりがちである。今回繰り広げられた、作り手と受け手、それぞれの立場で交わされる話からは、実状がうかがえ、示唆に富んでおりとても興味深かった。

●ヨコハマ・クルージング・ナイト

講座の終了後、横浜の夜景探偵が決行された。彼女を誘うための下見、若き日の思い出の再現、あるいは純粋に夜景鑑賞のため…、団員各人、それぞれの思惑を乗せて、船は山下公園桟橋を出発。みなとみらい21地区、ベイブリッジを通過し、本牧沖、鶴見つばさ橋、大黒大橋を経て、山下公園桟橋に戻る約90分の行程では、出航間もなく、乾杯が交わされ、なごやかな雰囲気となった。また、ビューシートでは、探偵団員と国吉氏と丸々氏を交えての臨場感あふれるトークセッションとなった。降りしきる雨も、照明の輝きを倍増させて、景観演出の名脇役となった。

（渡辺 明日香・共立女子短期大学助手）

講座会場

ツアー記念写真

ヨコハマの夜景演出

ヨコハマの夜景演出事業は、都心のビル群に埋没し、失われつつあった歴史的建造物に光をあてることにより、街の文化資産として再び蘇らせること、さらに多くの市民がこのライトアップ散策を楽しみ、まちの活性化につなげていくことを目的に、今から11年前、1986年より開始されました。事業にあたっては、行政と民間が一体となった団体「ヨコハマ夜景演出事業推進協議会」が活動母体となり、ライトアップを実施している施設所有者の方々の協力のもとに進めています。

この継続的な事業展開の結果、現在では関内・山手地域を中心に40近くの施設についてライトアップが実施され、最近では郊外部においても、まちの魅力づくりのひとつとしてライトアップが実施されるようになってきています。これらの成果を踏まえ、今後、ヨコハマの夜景演出には、大きくわけて2つの役割が、求められてくると考えています。

第一に、光に関する管理です。これはこれまで行ってきたライトアップ施設自体を維持させていくことから、そのまわりに出現する不必要な光を抑制していくことなど多岐にわたる光の管理です。ある程度の暗さがあるからこそ、ライトアップしている施設が映え、その空間を楽しむことができます。光は演出効果が高く、快適な空間を創り出すことに大きな役割を果たす一方で、その場の環境や機能にそぐわない場合は、非常に不快で不便な空間を創りかねません。このように、場所にあった光を的確に把握し、コントロールしていくことが必要になってきています。もう一つは、新たなヨコハマの夜の魅力を創り出していくことです。創り出していくというより、探し出していくという表現の方が妥当かもしれません。例えば多くの人が持っているヨコハマのイメージとして「港」があります。横浜港の夜景も、ベイブリッジや鶴見つばさ橋などのライトアップにより魅力を高めつつありますが、夜間空間の向上という面ではまだ多くの可能性を残している場所ともいえるでしょう。港の表情を創り出している倉庫、クレーン、灯台など、どちらかと言えば無機的なものを、港の本来の機能である船舶の航行に支障を与えず、夜間においても効果的に演出する。これらの積み重ねにより、港の夜間空間はかなり魅力的になっていくのではないでしょうか。

鶴見つばさ橋

本牧埠頭のクレーン

今回「ヨコハマ照明探偵団」が行われ、荒天にもかかわらず多くの人がヨコハマを訪れ、ヨコハマの夜間空間を考えていただいたと思います。今後はさらにこのような市民の方々の自主的な活動が活発化することを期待し、新たな夜間空間の魅力づくりを一緒に考えていけたらと望んでいます。

(足立原 淳
・横浜市都市計画局都市デザイン室)

(写真：L.P.A.)

ツアーアンケートより

●船上からだけでなく実際に歩いてディテールもマニアックに確認したかった。　C.S.24才

●横浜に住んでいますが都市デザイン室の活動について知らなかったので大変興味深かったです。　T.H.22才

●まったく違う観点から夜景をみてらっしゃるお二人のお話を同時に聞けておもしろかった。とても勉強になりました。H.A.24才

●通常自分では入っていけない様なところから見てみたいなと思いました。　M.Y.29才

●横浜には山、海、街というバランスのよいスケールがそろっていると思います。ケバケバしい明かりはこれからも避け、この良質な夜、暗さをこれからも大切にしていってもらい、やさしい照明空間を提供していってほしいと思います。　H.K.27才

●行政の方でヨコハマはサイン灯が少ないよう努めていると聞いて、海から見て納得しました。　K.M.29才

●横浜の新旧入り交じった照明の共演、これからも楽しみです。　S.T.23才

●非常に立体的で魅力的な企画でした。　H.H.29才

●（横浜市に対して）単なるライトアップの計画をするのではなく自然環境との調和という点に重点をおいて計画を進めて頂きたい。人、動物、植物にやさしい環境づくりに期待しています。　K.N.28才

●横浜の夜景は美しいという面ではもちろんのこと、「誘導のデザイン」という面でも優れていると思います。これからも期待しています。　J.M.24才

●横浜は青春時代をすごした大好きな街なので市全体で夜景に取り組んでいる姿勢がうれしいです。ただ、新しいものばかりが多くなってきているので古いものをより一層大切にしてください。　T.S.32才

●個々の観光ポイントを点で結ぶような現状の段階から、ラスベガスの街のように街まるごとがある物語を持ったアミューズメントライフタウンになれば面白いと思う。（むろん歴史や現状の横浜のアイデンティティを生かした横浜の新しい物語であるが）　R.T.29才

●港横浜ばかりではなく、いわゆる山の方の照明デザインの考え方についてのお話をお聞きしたかった。確かに港は横浜のアイデンティティなのだが、市民の多くが住む山の方の照明デザインのあり方にも興味があります。　N.I.37才

●船上での丸々さんと国吉さんの話がとてもくだけた風にはずんでよかった。　M.K.27才

●横浜の地形とか有名なビルなどの予備知識を仕込んでおけばもっと今日の解説も有意義に聞くことができたのにと自己反省した。　N.F.25才

恋愛夜景ロン

照明デザイナーとして夜景をつくることを仕事にしている立場上、気が付いてみると夜景を都市論や建築論、あるいは文化論など、とにかく出来る限り難しい言葉で語ることが多いことを、しばしば反省することがあります。けれども、お役所のエラーイ人や建築物を所有する不動産会社の社長さん、高名な建築家の先生を前にして「夜景は、恋人達のためにあるのです・・・」などと説明するのは、何となくはばかれるじゃないですか。それよりも、崇高な比較文化論や建築、都市空間論のほうが「箔がつく」ような気がして、ついインテリな言葉を並べてしまうのです。そんな理由で照明デザイナーが恋愛夜景ロンを語ることは、何となくタブーなのではないかと思っていました。

このところ、僕自身がかなり入れ込んでつくった夜景が立て続けにオープンしました。昨年は、臨海副都心のシンボルプロムナードや道路、広場の照明でしたし、ついこの間は、横浜のクイーンズ・スクエア（7/18オープン）などがそうです。いずれも出来てみると夜にそれらの空間に集まってくるのは、10〜30代の男女のカップルがほとんどです。この現象は、文化論的には、どのように説明されるのでしょうか。

ともあれ「夜景がきれいだから、○○に行ってみない？」というお誘いの言葉が、かなり交わされているのではないかと想像しています。「美しい夜景を見に行く！」という誘い言葉は、誰にでも公平に与えられたセリフなわけですし、それは、ひょっとしたら「ピザがおいしいお店に行こう！」といった時に、そのお返事として「でも私、ピザはきのう食べたもん！」などという断りのセリふの発生確率との比較においても絶対に有利であると思うのです。

夜景評論家、丸々もとお氏は、（ちょっと遅れてきた田中康夫のような存在ですが）夜景を恋愛、それも男の子が女の子を口説き落とすための必要な背景設定として語っているところがおもしろいのです。夜景がきれいに見えるとっておきのレストランやバーの情報が満載した本が売れることからも、夜景という現象が経済活性効果を与えていることが証明できるでしょう。「美しい夜景がみえる」ことがレストランのプレミアムになって、その場所の不動産価値が高まったり、男の子が彼女のために大判振る舞いをするわけですから、恋愛夜景の生み出すGNPだって、このご時世ばかにならないと思うのです。

きっと僕も来年あたりは、「夜景は、恋人たちのためにつくるのです！」というプレゼンテーションをしていることでしょう。

（東海林弘靖・L.P.A.）

参加者より

船乗りのミナト・ヨコハマ

数年前にギリシャのアテネに行ったときの話。レストランで一人昼食をとっていると、見知らぬおじさんが声を掛けてきた。あやしいと思いながらも話につき合っていると、「おれは船乗りで、横浜に行ったことがある。あそこ大好き。山下公園知っているか・・・」などなど。そういうのってカモ狙いの常套手段だよな、と思いながらも適当に聞いていると、その頃まだ横浜には数回しか行ったことがなかった私自身なんかよりもよほどいろいろ知っているみたいで、結局逆に教えてもらったりして何か変な経験だった。それにしてもさすがミナト・ヨコハマ、どこまで本当かは分からないが、国際的だなと妙に感心してしまった。ただこのおじさんの話はどこまで実際にあり得るのだろうか。つまり今でも横浜では世界中の船乗りが街の中を歩いたりしているのだろうか？昔から横浜の魅力といえば異国風の雰囲気を漂わせている点が挙げられるし、そもそもミナトの持つ魅力というのはそういった船乗りという言葉がかつて連想させたような荒々しい自由さというのもあると思うが、現在のヨコハマではどうなのだろう。言うなれば都市の統制からはみ出る闇の部分。関内地区の華麗なライトアップとともにその隙間に潜むような闇の部分が結びついたらさぞかし魅力的な都市空間を生み出すだろうし、そういった所を教えてもらえるような機会があれば楽しみなのだがと、そんなことを思いながら船の中から夜景をながめていた。

それにしてもその一方の華麗なるライトアップの部分を担ってきた横浜の都市デザイン室の存在というのは本当にユニークなものだとあらためて思った。実は私自身は用あって対談には遅刻してしまい、遊覧船ではビールを片手に「ここ電波が入ってこないよ」などとと言いつつ雑談をしていたため、一体どんな話があったのかは実際のところほとんど聞かずじまいだったのだが、そのかわりと言っては何だが、都市デザイン室の方などに直接いろいろな裏話を聞かせていただいた。例えば知らないうちに新しいコンビニが出来てしまってどうしようもなくて困った話など。先陣をきってこれだけのことをしてきた横浜都市デザイン室だから、今後どのような方向に向かうのかはいろいろな方面から注目されるのであろう。ライトアップに関しては今後まだ新たに灯されるものもあるようだから、まだ少し点の存在に感じられるものが面まで広がっていってより華麗さを増すのだろうか。私個人としては遊覧船などはいますこし観光客向けの様な気がしたが、今後は地元に住んでいる人が日常生活においてライトアップの中で遊べるような環境に成熟していかないのだろうかという気もした。そのためには夜景というのは必ずしもきれいである必要はないと思うし、大切なことはライトアップなどの照明デザインが人々にどういった刺激を与えて生活スタイルに取り込まれていくかというところにあるのではないだろうか。

ところでさっきのアテネのおじさんはワインを一杯おごったのが災いしたのか次の日ホテルの前まで現れたのだ。さすがにその時は相手にしなかったが、やはり暇であやしい人だったようだ。

（吉沢望・東京大学）

スタイルのない光

3年前、知人につれられて行った埠頭近くで、今までに見た景観とは性質の違う光に出会いました。「きれいな夜景があるんだよ。」の言葉とベイエリアの夜景に期待し、きれいなという言葉で想像できる光景をいくつか頭に描いていました。

そこで私が出会ったのは、白々と夜空に光る無秩序で、ある種野蛮な光だったのです。そこは、まぎれもなく埠頭（ベイエリア）には違いないが、巨大な工場が立ち並ぶ川崎の工業地帯であり、もくもくと煙が上がった煙突、タンクや工場は、まさに発光した建造物であり、川崎の夜景を見事なまでに堂々とつくっているのでした。それを見た瞬間、固定観念としてあったムキ出しで白っぽい光を嫌っていた事に恥ずかしさを感じました。ただ必要な所に光を置いた素のままの光と、あるがままに構築されたこの景観におもしろさを感じました。

様々な光に出会うことは、今まで見えていなかった何かに気づく事かもしれません。つくられたスタイルやデザインの意図がない工業風景は、光の在り方について何かを感じさせるのではないかと思います。

（長坂 房子・三菱電機オスラム株式会社）

「新潟にこいてば、待ってるすけね」

私と面出先生の出会いは、昨年の秋に新潟県及び新潟市の主催でおこなわれた、「明日の住まい展」というイベント・講習会からです。「明日の住まい展」というのは、毎年あるテーマをかかげて、色々な住環境について広く市民に考えていただき、豊かな生活をしていただく指針となるよう行われているイベントです。面出先生には「いえのあかり、まちのあかり」という内容で講演をいただきました。その企画を担当した中で、考えさせられた事をお話させていただきます。

まず、なぜ今回のテーマがあかりに目を向けたかというと「新潟の町並み、住環境は個性がない」との意見の中からスタートしました。かつての新潟市は「堀」と「柳」にめぐられた風情のある、独特の味わいをもった「水の都」だったのです。それが、昭和39年の新潟国体を機に、その堀は埋め立てられ広い道路にかわりました。柳の木は切り取られ拡幅された道路ぞいにビルが立ち並びました。長い時間を経てつちかわれた町並み文化が、その時消えてしまったわけです。川面に映し出された、美しい外灯の光も消えてしまったのです。しかし、ここ数年では「堀」の復活、「水の都」の再生という街おこしが語られ、行政だけでなく広く市民も交えた町づくり講座がひらかれるようになりました。人々の目は、ようやく自分達が住む町に関心がもてるようになり、新潟の新しい個性や文化を持った町並みや、住まいづくりが語られるようになってきたのです。そして、それらは色々な方法で具体的に提案されるようにもなってきました。その、具体的な方法のひとつの中に「あかり」の提案もされはじめてきたわけです。新潟は、個々の住宅レベルで考える時、ただ家をつくれば良いという、家づくりに対する心の余裕みたいなものが無くて、外構・道路、そして夜に映し出されるあかりにまで考えが及ばなかったのです。結果的にそれが「個性のない町並み・町のあかり」をつくり出してしまったのではないかと考えたわけです。今回、面出先生にお願いしたテーマは、そんな中で現在そして将来の新潟の町並み・住環境の要素のひとつとしてあかりをとらえ語っていただいたという事でした。

さて、そんな中で新潟のあかりを再認識すべく、50万都市を私どもでウォッチングしてみました。数日間昼の新潟、そして夜の新潟の町をブラブラ歩きました。あらためてウォッチングした新潟は人に語れる「あかり」の何と少ないことかと驚かされてしまいました。良いあかり、悪いあかり以前に目についたのはパチンコ屋のあかり、コンビニエンスストアーのあかり、そしてハデな外観を映し出す結婚式場のライティングでした。ただ一つのすくいは、信濃川にかかる万代橋のあかりでした。風情あるアーチ橋と川面に映し出されたあかりは、これこそ新潟の代表的なあかりだと叫ばずにはいられませんでした。新潟はようやく「水」と「緑」と「光」についての住環境に目を向けはじめたのです。

私は、昨年の面出先生の講演の中で忘れられない言葉があります。それは「新潟には、良い暗闇が多くある」という言葉です。けっして新潟を映し出すあかりの量は東京や他の都市にくらべて多いという事ではありませんが、良い意味の新潟の暗闇にこれからどんな「あかり」をつくってゆくのか、そんな楽しみは、まだまだあると言ってくれた言葉だと感じました。これからの新潟のあかりは、新潟に住む我々の仕事です。我々が活動してゆく中で一つ一つの積み重ねが新しいあかりの文化をつくってゆくのだと思っています。そしてまた、住んでいる人々にはわからない新潟の側面もあるはずです。それは倶楽部の皆様にアドバイスしていただければとも考えています。面出先生に新潟に来ていただいた事を機会に地方都市、「にいがたのあかり」を色々な角度から体験し、考えてゆきたいと思っています。そして、今は何とか照明探偵団倶楽部の新潟班（支部？）を結成しようと呼びかけています。今後新潟でも照明ゲリラやウォッチング等活動が行われることを願っています。新潟のおいしい魚と米と、そして美味な日本酒（地酒の数々）・・・。ぜひ皆さん「新潟にこいてば、うんめぇー酒がいっぺことあるすけにね」

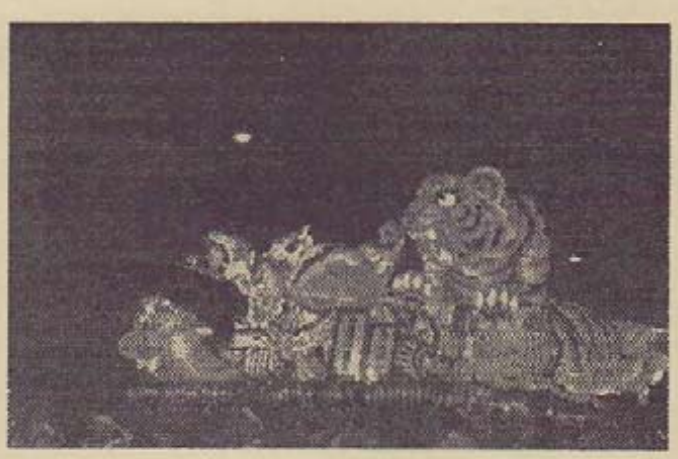
最後に、新潟のあかりにこれから目を向けてゆこうとした第一歩が、面出先生のあの講演だったと、今後も熱く語られることを私は夢見ています。

（小林 勉・三善設計）

"ねぶた"の明かり

この夏、はじめて青森のねぶたを見た。以前からメディアを通してねぶた祭りを見たことは何度かあったので、なんとなく知っているつもりでいた。しかし今回実際に現場へ行き、間近で見た私はすっかり圧倒されてしまった。人々の熱気に包まれた通りを20台ものいわゆる"ねぶた"と言われる張子が練り歩く。ラッセラー、ラッセラーというかけ声とともに威勢良く踊り続ける"跳人(はねと)"と呼ばれる踊り手達。1台のねぶたに1000人以上もの跳人やお囃子が付き、それが何台も何台も眼前を通り過ぎて行く。まず人間の勢いに驚く。ほとんど半狂乱の状態と言っていい。北国の人達の底力を見せつけられた様な気がして一瞬たじろぐ。そして、"ねぶた"である。極彩色の色づけが施された紙の内側に明かりが灯った。明かりが灯ることで、そこに初めて命が宿ったかのように、色彩の輪郭が浮かび上がる。武者絵の表情が赤々と燃え、躍動感を持ち始めた。その時点で、主役は人ではなく完全にねぶたそのものになっていた。どのねぶたも表情は猛って恐ろしい。それなのにどこか優しい。そう感じたのは、ねぶたの明かりがどれも紙を通しているからではないだろうか。何とも言えない柔らかさと温かみを持って、内からそっと灯るような明かりの風情にほっとした。闇の深かった昔、大灯篭に火を灯して蝦夷征伐に用いられたという"ねぶた"。暗闇の中でその明かりはさぞかし神々しく、荘厳であったことだろう。街の中の明かりの暴力が気になる現代社会では、そんな重みのある明かりに出会う機会も滅多に無くなってしまった。たまには古き良き日本の明かりを求めて、火祭りにでも出かけてみませんか?

(田沼 彩子・慶応義塾大学修士2年)



ねぶたまつり

EXHIBITION REPORT

ミュンスター野外彫刻展—カッセル・ドクメンタX報告

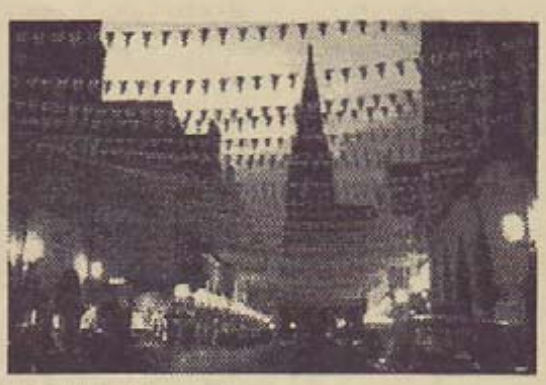
skulptur. projekte IN MUNSTER 97 - documenta X IN KASSEL

海外照明探偵番外編　～中世都市ではフェスティバルカラーのペナントアートが夜風にはためく～

7月に休みをとってドイツの2つの野外アートイベントに行った。以下はその報告と紹介。

中世の面影を残すメルヘン都市ミュンスターでは今、1977年、1987年に続いて第3回目の"Sculpture Project"(970622-970928)が開催中である。60人余りのアーティストによるインスタレーションが市内の公共空間や建築物などに設置され、それを地図をたよりに貸し自転車に乗ってまわる。最も印象に残ったのは旧市街の中心部、プリンシパルマルクト通りに設置されたダニエル・ビュランの作品である。(写真)多くの作品が夜の闇に埋もれてしまう中、光の移り変わりに応じて多様な表情をみせる風景彫刻といえる。プリンシパルマルクトの建築に取り付けられた蛍光灯ブラケットによって、そのペナントアートは日没の遅いヨーロッパの夜空に輝き出す。このペナントの紅白のストライプはミュンスターの伝統的なカーニバルの色らしい。こうして市内観光を兼ねた昼間の自転車乗り+照明探偵で疲れた体にドイツビールがうまいのだ。9/28まで開催中、情報はホームページhttp://www.artthing.de/muensterを見よ。ちなみにカッセルのドクメンタXは大混雑でほとんど見ずじまい。もし行くならヴェネチアビエンナーレの方がおすすめ。

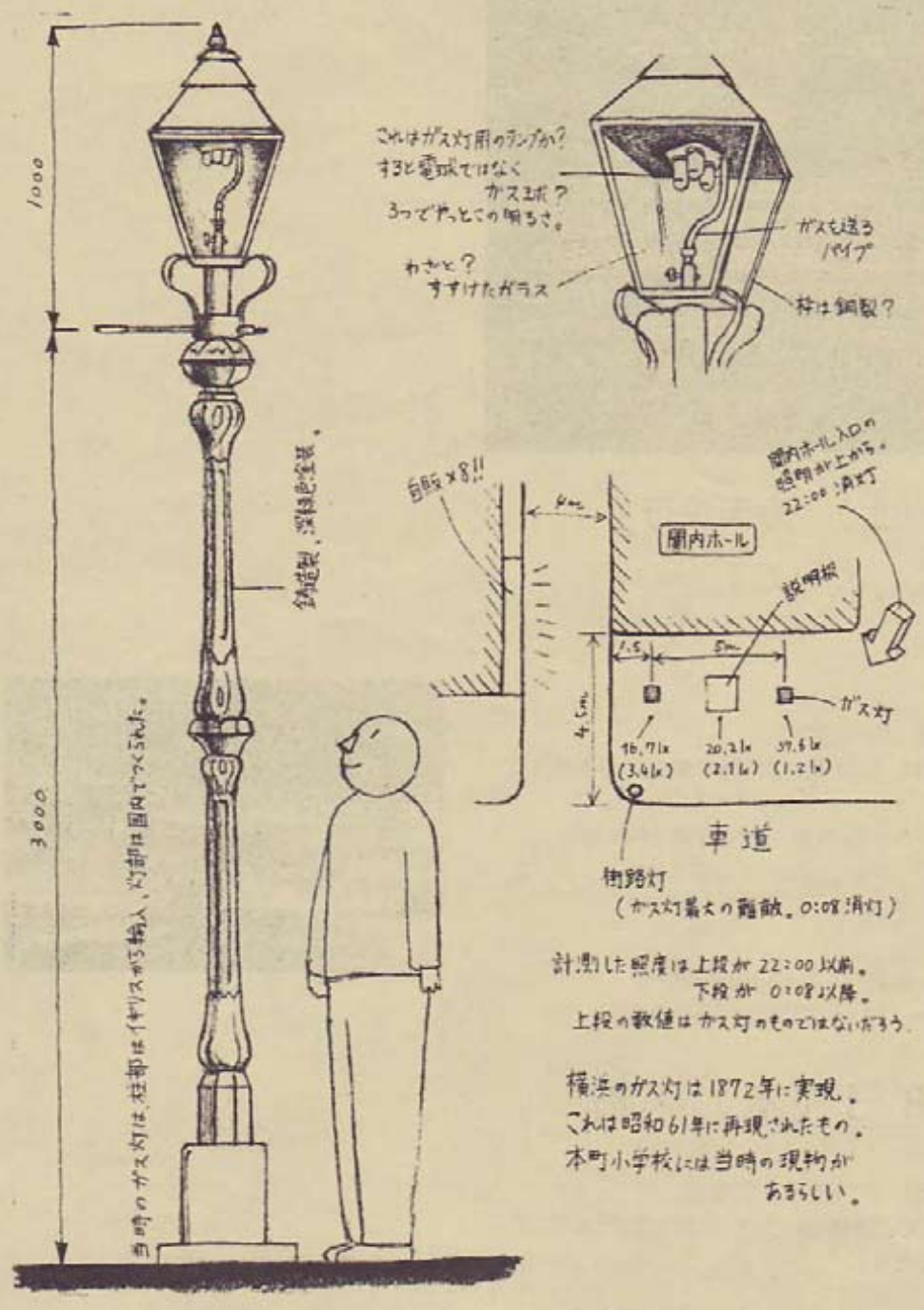
(木下 史青・L.P.A.)



上・ダニエル・ビュランの作品
左・プリンシパルマルクト通りのブラケット(撮影・木下)

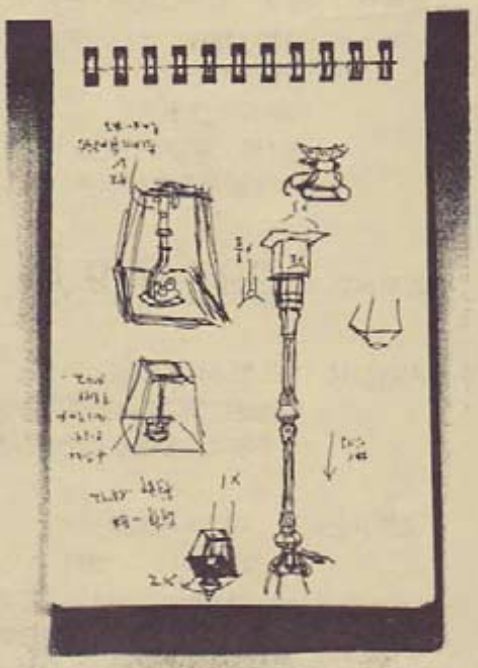
照明探偵実践ミニ講座
【初級】
ポール灯をスケッチしてみよう
「ヨコハマ・馬車道のガス灯」

照明探偵実践ミニ講座をスタートします。
第１回は、昨年より照明探偵団講座に参加している坂本さん（横浜市在住）に横浜の街灯調査を依頼しました。普段から照明器具を注意深く観察・計測し、記録することによって、しくみを理解し、またその配置を調べながら歩きまわることによって街や都市を体で覚える事ができるのです。その為に探偵団員は７つ道具を駆使して日夜照明調査に飛び回っているのです。（つづく）
※事務局では会員の方による全国街灯調査報告をお待ちしております。



横浜は馬車道の関内ホール前に、とても暖かく、懐かしい光を発する２本のポール灯がある。それはガス灯設置当時のモデルを再現したもので、本当にガスによって点灯している。しかし、こんな素敵な物を何故こんな所に設置してしまったのだろう…。周囲の照明がまぶしすぎて全くと言っていいほど目立っていない。ところが、ガス灯は消える事を知らないらしい。昼でも真夜中でも点灯しっぱなしなのだ。しかも、午後10時になると関内ホールの照明が消え、午前０時を回ると街路灯まで消えてしまう。隣の自動販売機群の光が消えないのは残念ではあるが、この時間であればガス灯が照明としての役割を果たしているのである。そんな訳で、当時の人々にはこのガス灯がどれだけ新鮮に映った事だろう、と明治初期の出来事に思いを馳せたい人は午前０時を過ぎてからがオススメ。ただし、この時間に電車で来てしまうと東京方面は蒲田までしか帰れないので注意されたし。

（坂本 陽一・東京造形大学３年）



坂本さんのスケッチブックより

照明探偵団イベントカレンダー

夜景ウォッチングツアー第5回

1997年10月4日（土）

照明探偵団「第5回夜景ウォッチングツアー」参加者募集中！
秋の夜空に咲く、ライト・アース・アート／電照菊の里を訪ねる

昭和25年に始まり、晩夏から秋にかけて行われる電照菊栽培が、町の風物詩になっている場所が愛知県渥美半島にあります。これは、夜間に照明を点灯して日照時間を人工的に調整し、菊の開花や出荷の時期をずらす為のもので、夜11時頃になるとビニールハウスの明りが一斉に点灯し、暗闇に数百棟ものライトハウスが浮かび上がります。その光景は、まさに光の芸術。壮大な光の群れと輝きは、電照菊の里と呼ばれるここでしか見ることができません。
秋の夜空を彩る、幻想的なライト・アース・アートを一緒に見に行きませんか。

〆切迫る！

日　時　1997年10月4日（土）　雨天決行
　　21：00　受付
　　21：30　～　深夜1：30　夜景ウォッチングツアー
主　催　照明探偵団
集合場所　JR豊橋駅（愛知県豊橋市）
目的地　愛知県渥美郡赤羽根町
定　員　20名（応募者多数の場合は抽選となります）
参加料金　5000円（集合場所までの交通費、及び現地での宿泊費は含みません。各自、手配して下さい。）
応募方法　往復ハガキに住所・氏名（フリガナ）・年齢・電話番号（FAX番号）職業（職種、学校、学部、学科）探偵団員No.（登録済の方）を記入の上、
照明探偵団事務局
〒150　東京都渋谷区神宮前5-28-10　L.P.A.内照明探偵団
「第5回夜景ウォッチングツアーTT」係までお送り下さい。

応募〆切　**1997年9月18日（木）必着**

問合わせ　TEL.03-5469-1022（ﾗｲﾃｨﾝｸﾞ ﾌﾟﾗﾝﾅｰｽﾞ ｱｿｼｴｰﾂ・菊西）
※詳細については返信はがきにてご連絡致します。なお内容については予告なく変更する場合があります。

スケジュール　10／4（土）

	21：30	受付
	21：30	バスにて移動
	22：30	赤羽根町電照菊栽培鑑賞
深夜	0：30	バスにてJR豊橋駅へ。
	1：30	JR豊橋駅着後、解散